日本行動計量学会会報
第22号
1980年10月10日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

悪貨は良貨を駆逐する

井関利明

最近、調査に関連して「グレシャムの法則」を痛感することが多い。行動計量学の一分野でもある「消費者行動のライフスタイル分析」に、例をとってみよう。

ここ一〇年余、筆者は、ライフスタイル分析の普及と啓蒙に努めてきたつもりなのに、どうもその成果があったようには見うけられない。数年前に、一時ライフスタイル・ブームがあったためであろうか、かえって一知半解な議論が横行し、怪しげな調査結果がまかり通っている。二、三の態度変数や価値観変数をとり入れただけで、あるいはクラスター分析やＡＩＤの技法を活用しただけで、「ライフスタイル分析」を僭称する稚拙な試みが多すぎる。ブームへの便乗なのだろうが、それがかえってライフスタイル分析そのものを曖昧なものに見せ、疑問や批判の対象としてしまったようだ。

一方では、多数のいわゆるライフスタイル項目をしゃにむに押し込んだ、未整理のままの部厚い質問紙が、調査対象者をへきえきさせ、調査拒否をふやしている。これは、フィールド荒らし、といってよいだろう。

他方、クライアント側でも、費用の嵩む割りに、積みあげのきかない恣意的な結果に、不満が少なくない。昨今では「ライフスタイルなんて、やっぱり役に立たない」「人間の質的差異を数量で表わすなんて」「あれはもう古い」などと、したり顔で語る人びとがふえてきた。まさに、悪貨が良貨を駆逐するの図、である。

「ライフスタイル」という用語が、実は、社会学者Ｍ．ウェバーの著名な概念"Lebensstil"の英訳語であることを知る人は、意外に少ない。日本では、前者が「生活態度」、後者が「生の様式」と訳されているため、ライフスタイルとのつながりは見失われてしまっている。したがって、人間現象や社会現象へのかれらの深い洞察は、残念ながらまったく生かされていない。

ライフスタイルが単なる流行語にすぎないと誤解され、その分析法も、たかだか価値・態度変数の導入と多変量解析技法の多用だと考えられているのも、いたしかたのないところだろう。

ライフスタイル分析が「一つの学」として確立されるためには、つぎの四つの側面がうまくバランスをとる必要がありそうだ。まず、前提となる人間観・人間モデルと新しい認識論を含めた「思想としてのライフスタイル」。第二が、行動の説明原理という意味での「理論としての」、これが変数の範囲を限定し、仮説のセットを示唆し、必要なデータのタイプを指定する。第三は、数量化の方法、データ解析を中心とする「技法としての」。第四が、その成果を問題解決に応用するための「戦略としてのライフスタイル」である。

従来、技法としての面で、多くの成果があげられていることを否定はできない。が、仮説のセットを整序し、因果関連を探る理論化の試みは、まだほとんどおこなわれていない。目新しい解析技法の採用とデータの提示だけでは、必ずしも十分な説得力をもち得ない時代がやって来たようだ。技法やデータの適切性を、そして良貨か悪貨かを、教えてくるのが、他ならぬ理論だからだ。行動計量「学」の他の分野でも、問題状況は似たものではなかろうか。

（日本行動計量学会理事、慶応義塾大学文学部教授）

本号は8ページです

第八回大会報告

実行委員長　藤田廣一

今年の大会は私達のキャンパスである慶応義塾大学工学部（横浜市港北区）でお引受けいたしました。この大会はもう八回目だそうで早いものだと感心しました。回を重ねているだけに、前回実行委員長の生沢さん、学会事務局の水野さんから細かいノウハウを頂戴できて助かりました。実行委員は主として慶応の者で組織しました。すなわち　井関利明（文学部）岩男寿美子（新聞研）、岩田暁一（商学部）、浦　昭二（工学部）岡太彬訓（立教大学社会学部）小谷津孝明（文学部）、高瀬守一朗（医学部）、林　峻一郎（医学部）、村田昭治（商学部）、の諸氏で、行動計量学会らしく専門分野が異っているのは楽しいものでした。事務局は福川さんにお願いしました。その報告を次に書いてもらいます。（慶応大工学部）

・大会事務局報告：

今年の参加者数は、二四九名です。内訳けは、正会員一九四名、準会員三九名、非会員八名、賛助会員の所属員三名、招待者五名です。招待者は、特別講演者とパネル討論者、フロアー討議者の方々です。三日間の参加状況はほぼ次のようでした。

日	セッション等の別	発表件数	出席者（概数）
第一日	A社会・心理	五	九〇〇
	B尺度構成		
	総会	五	五〇〇
	特別講演		八〇〇
	懇談会		二〇〇
			三四
第二日	C社会・心理	五	六〇〇
	D社会医療		六〇〇
	特別講演	五	二〇〇
	パネル討論		一〇〇
第三日	E計算機・パターン認識	五	五〇
	F数量化	五	六〇
	G臨床医学	五	五〇
	H政治	一	八〇
	I多変量解析・社会・心理	一一	五〇
	J臨床医学・医用電子	九	五〇

発表件数は六六件で、これまでの最高です。特別講演二件にパネル討論、それに発表時間を全て二〇分としたこともあって、三日目は三会場にしました。会場数を増すと、参加者にとって聞きたい発表が重なる可能性が増す欠点があるのですが、発表件数の増加や出席者の増加、会場収容能力からみても、今回の処置は妥当だったのではないかと思っております。

クラスカル氏の特別講演は、高根芳雄氏に通訳をしていただき、大教室がほぼ満員となる盛会でしたが、後で参加章をつけてない人達も、だいぶ参加していたのではないかと気が付き、二日目から参加章のチェックを重視したのですが、後の祭りだったようです。

会場が最寄りの駅から遠かったことと、冷夏といわれながら会期中は快晴続きとあって、会場にたどり着くと汗びっしょり、しかも会場は冷房なしという具合で、皆様には大変過酷な大会だったことと思います。これも二日目から急きょ冷麦茶をサービスして、せめて一時の暑さしのぎをしていただいたのですが、これも準備不足で初日からサービスできず、気の効かないことでした。

また、会場の周囲を工事車が走りまわったり、ブラインドが風で音をたてたりで、騒音対策にはほとほと手を焼きました。皆様にも大変御迷惑だったことと思います。

この工事車のことにしろ、丁度大会期間に重なって生協食堂が夏休みになるなど、年初に会場を決めた時には無かった悪条件が重なり、いろいろ御不便、御迷惑をお掛けした点、お許し下さい。

会員の皆様はじめ、実行委員諸氏、大学関係者各位、アルバイト諸君の御協力、御支援により無事大会を終了できましたことを心より御礼申し上げて報告を終ります。

（大会事務局・福川忠昭・慶大工）

第八回大会発表論文抄録集の購入を希望する方へ

第八回大会（慶応大）の抄録集に少々の残部があります。

送料を含む一冊の代金三千三百円を振替（東京八一一四八〇五六日本行動計量学会）でお送りください。「第八回抄録集購入希望」と通信欄に明記すること。

過去の分についても同様です。

第一回（統数研）	一千円
第二回（統数研）	一千五百円
第三回（青学大）	残部なし
第四回（東京大）	一千五百円
第五回（岡山大）	二千円
第六回（立教大）	二千八百円
第七回（大阪市大）	二千八百円
第八回（慶応大）	三千三百円

‖ ‖ 会議議事録 ‖ ‖ ‖

◇理事会（八月二十五日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　七名

1　第八回大会の総会における五十四年度事業報告、五十五年度計画説明は、各部門の担当理事が行う。また、総会議長には大会実行委員の中から推す。

2　五十四年度決算に関して事務局報告（5ページ参照）を了承、監査を経て総会に提出する。

3　五十五年度予算案は、大筋を従来どおりとし、前年実績に沿って事務局が作成、総会にはかることとする。

4　大会準備経過の報告、各種委員会報告。

◇理事会（九月五日）
於　慶応大学工学部
出席者　理事　九名

1　本学会の新しい活動の方向と具体案について意見を交換。

2　五十六年度の第九回大会の開催校は、第一候補を名古屋大学とし、同大関係者と交渉する。

3　長期にわたり学会費を滞納している会員の除籍問題については事務局が検討して理事会に提案する。

第九回大会は　名古屋大学で開催

〃〃〃〃　会期は九月三・四・五日の三日間

昭和五十六年度の第九回大会は名古屋で開催することに、このほど決まりました。会期は、昭和五十六年九月三日（木）から五日（土）までの三日間と、決定しています。現在、内田良男氏（名古屋大・教育）を中心に、実行委員会の編成など、開催に向けて準備中です。本学会の大会が、各地・各機関の会員の手でつぎつぎと企画・運営されていくことは、本学会の発展を示すもので、まことに嬉しいことです。

大会の詳細は、後日全会員に通知されますが、参加・発表の準備は早いほどベターなもの、いまから直ちに進めてくださるようお願いいたします。

◇運営委員会（九月四日）
於　慶応大学工学部
出席者　運営委員　十八名

1　講習会・シンポジウム・広報の各担当幹事が、これまでの活動経過および今後の予定について報告。

2　直江優委員（東大・文）が海外出張のため、講習会担当幹事を辞任、代って丸山久美子委員（青学大・文）を担当幹事とする。

3　その他、運営委員会の活動全般について意見を交換した。

〃〃〃〃〃〃〃〃　本学会賛助会員の紹介

本学会には、賛助会員（法人）の制度があります。

現在、学会の諸活動を大きな支障なく続けられるのは、学会設立の趣旨に賛同し支援してくれている賛助会員の存在に、その多くを負っています。

昭和五十五年十月一日現在の賛助会員は、つぎのとおりです。

朝日新聞社
（株）朝日広告社
川村義肢（株）
（財）計量計画研究所
（株）サーベイリサーチセンター
産業図書（株）
（株）市場調査社
（株）社会行動研究所
（社）集団力学研究所
（株）数理計画
（財）生命保険文化センター
センチュリリサーチセンタ（株）
（株）大広
（株）電通
（株）電通リサーチ
（社）中央調査社
日本アイ・ビー・エム（株）
（財）日本生産性本部
（株）日本精神技術研究所
（社）日本損害保険協会
（株）日本ビジネスコンサルタント
（株）野村総合研究所
（株）日立製作所システム開発研究所
（株）ビデオ・リサーチ
（株）博報堂
毎日新聞社
（株）マーケッティング・サービス
（株）マーケティングセンター
（株）三菱総合研究所
読売新聞社
（社）輿論科学協会

昭和五十四年度会計報告と本年度予算について

先の第八回大会（慶応大学工学部）で、昨年度の決算報告（5ページ）と本年度予算案（4ページ）が承認されましたので、ここに掲げます。なお、本学会の監事、宮原守男（虎の門法律事務所）、安田三郎（関西学院大・社会）の両氏には、会計監査のほかに、いろいろと懇切なご指導をいただきました。この機会に厚くお礼を申し上げます。

本年度予算は、昨年度未発行の和文誌の分を含み、八六〇万円の規模になりました。しかし、これは収入を低くみて支出を押さえるという控え目な数字です。実際には、諸物価が値上り気味のおりから、まず支出増の心配があります。すでに事務経費は極力切詰めていますので節減の余地はほとんど残っていません。となると、残るは一つ、学会費の徴収を厳格に実行することでしょう。従来は未納者への督促が甘かった点を反省し、学会費の積極的な徴収を図り、予算を上廻る収入を得たいと思います。会員諸氏のご協力をお願いします。

（事務局・水野　欽司）

昭和55年度　会計予算

収入	55年度予算案	54年度実績
前年度繰越金	1,350,663円	544,789円
学術定期刊行物補助金（注1）	770,000	760,000
55年度学会費	3,950,000	3,507,200
（正会員　650人×4,000円）	（2,600,000）	（2,240,000）
（準会員　120人×2,500円）	（300,000）	（247,500）
（賛助会員　35口）	（1,050,000）	（1,019,700）
他年度学会費	500,000	333,500
学会誌売上金	280,000	204,050
預金利子	10,000	8,713
計	6,860,663円	

支出	55年度予算案	54年度実績
学会誌製作費	4,940,000円	2,899,985円
（和文誌7巻2号（注2））	（800,000）	（和文誌7巻1号　697,905）
（〃　8巻1号）	（800,000）	
（〃　8巻2号）	（800,000）	
（欧文誌 No. 8）	（1,270,000）	（欧文誌 No. 6, 7.　2,202,080）
（〃　No. 9）	（1,270,000）	
月例会費用	150,000	105,000
各種委員会活動費	200,000	174,930
人件費	100,000	59,300
印刷費	250,000	191,100
通信費	700,000	482,090
消耗品費	30,000	24,765
交通費	10,000	7,730
会合費	150,000	125,635
雑費	30,000	43,400
予備費	300,663	0
計	6,860,663円	

（注1）内定額　（注2）54年度未発行の分

昭和54年度　会計報告

（自54年4月1日～至55年3月31日）

収入	決算	予算	増減
前年度繰越金	544,789円	544,789円	0円
学術定期刊行物補助金	760,000	760,000	0
54年度学会費	3,507,200	3,950,000	△442,800
（正会員560人×4,000円）	（2,240,000）	（2,600,000）	（△360,000）
（準会員　99人×2,500円）	（247,500）	（300,000）	（△52,500）
（賛助会員　34口）	（1,019,700）	（1,050,000）	（△30,300）
他年度学会費	333,500	400,000	△66,500
学会誌売上金	204,050	250,000	△45,950
総会・講習会決算残高	121,646		121,646
抄録集等収入	54,300		54,300
預金利子	8,713		8,713
計	5,534,198円	5,904,789円	△370,591円

支出	決算	予算	増減
学会誌製作費	2899,985円	3,600,000円	△700,015円
（和文誌　7巻1号）	（697,905）	（700,000）	（△2,095）
（〃　7巻2号）	（0）	（700,000）	（△700,000）
（欧文誌　№6）	（978,030）	（1,100,000）	（△121,970）
（〃　№7）	（1,224,050）	（1,100,000）	（124,050）
月例会費用	105,000	200,000	△95,000
各種委員会活動	174,930	200,000	△25,070
人件費	59,300	280,000	△220,700
印刷費	191,10,0	400,000	△208,900
通信費	482,090	500,000	△17,910
消耗品費	24,765	60,000	△35,235
交通費	7,730	20,000	△12,270
会合費	125,635	200,000	△74,365
雑費	43,400	30,000	13,400
選挙費用	69,600	69,600	0
予備費	0	345,189	△345,189
次年度繰越金	1,350,663		1,350,663
計	5,534,198円	5,904,789円	△370,591円

第8回大会 特別講演の印象

研究という事業の夢 ―古川俊之氏「寿命」を聞いて

林　峻一郎

このお話は、古川先生が大阪大に在任中からのもので、六十七年に老化の測定が始ったというから、十数年に及ぶ。その集大成を伺いたかったのだが、時間の制約上、要約的な展望にとどまったが、私には楽しくて面白いものだった。

生命現象の不思議さの中心が、当然、寿命である。これは身体現象というだけではなく、社会現象でもあり、私の立場からすれば精神現象でもある。話は社会現象にまで及び、寿命の社会要因の国際比較（先進国と途上国）の結果を示された。そうすると、個人としても社会としても寿命制御の可能性が生じてくる。

さらに、もし「長生き」できる社会が本当に豊かな社会としたら、その豊かさの中身とは何か、という文明批評ともなりうる。先生のお話では、どうも社会の「情報」機能が大きく関係しているらしい（ニワトリか卵かの問題はあるが）。

私にとって、なぜこのお話が楽しかったか、というと、「寿命」という明快な一点に的をしぼった単純さである。ここから、老化モデルとしては、コップに埃がたまって行くという愉快な構図が生まれたり、生命障害要素をみるためには、「機械の故障をみるとき」のようなワイブル分布という知恵が湧く。一つの知恵が次の知恵を生む、という息の長い、しかも個別データと巨大データを併用してのお仕事に、他人にどんなにでも豊かな空想をあたえる。私は、時々、「人間はいつかは気が狂うものだ（但し、通常は発狂する前に死ぬのだが）」という精神の寿命モデルを空想することがある。

これまた、長年にわたり、他分野で続けられている仕事に馴親んできたお蔭である。こういった、他分野への刺戟剤として、私自身は、このお話を実に楽しく拝聴することができた。まだまだ、未来のある研究のはずと思われるが、どこまでふくらみを増してゆくのか、夢は夢を生む。そして、一人の夢は皆に夢を伝える、そんな印象と感動を持った。（慶応大・医）

クルスカル氏の講演を聞いて

丸山久美子

第8回大会の特別講演に学術振興会の招聘により来日しているJ.B・クルスカルの講演があった。クルスカルはよく知られているようにMDSにおけるノンメトリカルなアプローチでユニークな方法を開発したアメリカ、ニュージャージーにあるベル電話研究所、数学。統計学研究センターの研究員でその研究領域は数学、統計学はもとより広く心理学、言語学などの分野にまたがり、人間の行動現象の計量化に深い洞察をもつ優れた研究家である。講演の題目は、

Analysis of data by geometric and multilinear method というもので線型の分析法を Bilinear, Tri-linear, Multi-linear method

などに分類し、従来までに開発されている多次元解析の手法を例にとって考え方の骨子を説明してくれた。多くの多次元解析的手法が開発されている現在、このように計算の手続きから分析法の性質を明確に分類し明示したということは行動計量学を専攻する研究者にとって大変有益であったと思う。クルスカルが分析法を上記のように数値解析的センスでまとめたということは、いわばクルスカルの特徴を示しているようで興味深いものがあった。

又驚くべきことに、クルスカルはこのために日本語で書いたデータを示し、時折り、日本語で説明したりして聴衆を感心させた。とかく外国から来る研究者の流暢な英語に眩惑されっぱなしの日本人研究者は日本語に慣れようとしているクルスカルの姿勢に親和感を抱き、来訪した国の言葉で健気に語りかけようとする彼の努力と熱意にひとかたならぬ尊敬の念を覚えたと思う。少くとも私はいまだに外国から来た研究者が短期間に日本語を熱心に勉強してきたという事例を知らないのでクルスカルの方法論のユニークさに目する以上に、日本語を一生懸命話されるクルスカルの人柄に感動した。

今後このような外国の研究者が多くあらわれることを望むしだいである。（青学大・文）

和文誌・欧文誌への投稿を！
いつでも受付けています

計量言語学の旅

安本　美典

今年の夏、まるひと月のあいだ、欧米をまわっていた。何人かの計量言語学者にあい、情報を交換するのが、主な目的であった。

七月二十四日、サンフランシスコにつき、カリフォルニア湾の橋をわたって、オークランドに行く。オークランドでは、以前カリフォルニア大学の教授をしておられたロバート・L・オズワルト博士のお宅に、一週間滞在した。オズワルト氏は、ある言語（たとえば、日本語）とある言語（たとえば、朝鮮語）との間の関係が、偶然以上のものであるかどうかを統計的にしらべるシスト検定法を開発したことで知られる。

オズワルト氏は、一九二三年の生まれ。はじめ、物理化学を専攻されたという。三十二才の時、もう一度、言語学科の学生となる。卒業後、カリフォルニア大学の教授となり、機械翻訳の研究に従事。その後、アメリカ・インディアン語の研究にむかう。一九六八年にアメリカ・インディアン語の研究に専念するため、大学をやめる。現在は、カリフォルニア・インディアン言語センターを設立している。この間、つねに、コンピュータを利用しての言語研究を行ってこられた。

オズワルト氏の家は、高台にあり、カリフォルニア湾をみおろすことができ、眺望は、絶景であった。家の裏には、ひどく大きな野生の鹿がでてき、リスが、木から木へわたっていた。

快適な一週間の、かなりな時間を、オズワルト氏とのディスカッションについやした。

七月三十一日に、デトロイトから、リムジンで、アンアーバーに行く。ここでは五日間滞在した。

"Statistics and Style"の編著者であるミシガン大学のベイリー博士にお目にかかった。

お博士は私に、"An Annotated Bibliography of Statistical Stylistics"（統計的文体論の注解的書誌目録）という本を下さった。また、ベイリー氏から、最近の計量言語学関係の文献を教えていただき、それを、ミシガン大学の図書館でかりて、コピーし、かたっぱしから日本に送った。

八月七日、アメリカを離れ、南仏のニースへ着く。ニースでは、ニース大学の教授をしておられたピエール。ギロー氏にお目にかかった。ギロー氏の「文体論」「意味論」などは、クセジュ文庫の翻訳がでているから、読まれた方もおられるであろう。

ギロー氏のお宅は、日本でならおそらく数億円はすると思われるすばらしい豪邸であった。

ギロー氏は、一九一二年の生まれ。がっしりとした体格のおだやかな方であった。英国、アメリカ、オランダなどで教鞭をとられたのち、一九六三年にニースにもどり、ニース大学の教授となられた。フランスのユニバーシティの停年は、七十才であるが、「自由になるために」、六十才の時に退職されたという。オズワルト氏といい、ギロー氏といい悠々自適で研究にいそしむ学者たちをみると、うらやましい感じがした。ギロー氏とは、語い量推定問題など、興味ある問題について討論したのであるが、やや専門的になるので省略する。

ニースからパリを経て、八月十四日、西ドイツのデュッセルドルフ空港につく。国電で二時間ゆられ、ボッフムに行く。ここには、ルール大学がある。

雑誌「計量言語学」の編集者であるG・アルトマン博士にお目にかかった。博士は、一九三一年の生まれ。もともとは、チェコ。スロバキアの人で、一九六八年のソ連軍侵入のさい、西ドイツに亡命されたという。おだやかな方であった。

一人旅の気やすさ。欧米の旅を堪能したという感じがした。

（本学会理事。産業能率大）

月例シンポジウム記録

○第二十七回〝フランスにおける"Analyse des Données"〟（オーガナイザー林知己夫・統数研）、昭和五十五年五月十七日、統数研、参加者五十名。

〝〝〝〝〝和文誌に投稿される方へ〟〟〟〟〟

和文誌「行動計量学」への投稿は、学会専用の原稿用紙（有料）が必要です。代金は一冊（五百字詰。五十枚）が三百円です。ご入用の方は送料（二冊まで三百円）を加えた金額を郵便振替（2ページ参照）で、学会事務局へお送りください。

会員からのお知らせ

生物統計に関する日米セミナー記録の発行について

工藤昭夫

一九七八年五月の標記の会議記録が、Environmental Health Perspectives. Vol. 32に印刷された。会議の運営、記録の編集にあたり、特に注意した事項の一つは、林の数量化を応用した英文の医学論文を執筆する際に引用に便利な総合報告を発表することであった。同じ巻に印刷されている「統計と環境に関する第五回シンポジウム」のテーマは「エネルギー、毒物学、法律」であり関係方面の参考になる。販売元はSuperintendent of Documents, U.S. Government Printing Office. Washington, D.C. 20402で直接送金すれば六・三八ドルで購入できる。出版物の整理番号は、DHEW Publication No. (NIH)80-218。なお、この雑誌は、会議記録や汚染物質に関する特集を発行する、環境専門の学術誌である。

（行動計量学会会員、九州大学理学部数学教室）

会員の声

グループ活動の状況

代　喜一

私の大学では、現在、ベル研究所で開発された多次元尺度法のプログラムパッケージの実用化が進んでいます。パッケージは十八のプログラムから成り、ほとんどフォートランⅣで書かれています。キャロルの外部展開法（PREFMAP）、MDPREF、INDSCAL、正準分解法と単調回帰法を用いたノンメトリックINDSCAL等々興味深いものが多く含まれています。このパッケージは、都立大地理学の助手の杉浦氏（非会員）が、個人的に購入され、氏の好意で電算室に提供されたものです。（ちなみに、都立大では電算システムは、事務局調査課電算係に属していて、電算室と呼ばれており、運営は委員会（教授、助教授等十一名よりなる）によってなされています。機種は、FACOM・M－160Sであり、コアメモリ768KB仮想記憶によって、2MBまで可能。）このことをきっかけにして、心理学、地理学、情報工学や政治学などを含んだ研究会を開こうという話が出され、すでに、学際的な交流が始まっています。これとは別に、心理学科では、夏休み明けから、多次元尺度法の研究会が始まりました。すでに、去年から数人で細々と進めていましたが、ここで拡大して研究会の形にしようということです。

今までの活動では、三相因子分析のプログラミングと応用、POVモデルの検討、キャロルの外部展開法の嗜好関数の一般化、単調回帰法を用いた多変量解析のノンメトリック化などの問題がとりあげられました。実際の問題を持ち寄って、「データに語らせる」にはどうしたらよいかと苦心しています。（行動計量学会会員、東京都立大学心理学博士課程在学）

学会誌バックナンバーの一括購入のお勧め

既刊の学会誌を一括購入したい、という機関が、最近、増えております。

和文誌「行動計量学」の創刊号（1巻1号）から最新刊（7巻1号）までの総額は一万六千円。

欧文誌"Behaviormetrika"は、No. 1からNo. 7まで、一万四千円。両方合せてちょうど三万円です。大学、会社、研究室等で、一括ご購入下されば幸いです。

ご希望の方は、事務局まで連絡下さい。

なお、一号ずつでもお分けしております。各号の単価は、会報の前号（21号）をご参照下さい。

編集後記

◆本号はいつもの号と違っていることに気づかれたでしょうか。そうです、当会報空前の8ページ建てとなっています。空前の出来事は喜ばしいことですが、これが絶後とならないようにしたいと思っています。

◆そのためには、会員の声などを始めとし、会員諸氏からの原稿が必要なのです。どうぞ奮って御投稿下さい。

◆2ページの報告にもみられるように「第八回日本行動計量学会大会」が盛会裏に終りました。会計報告をも含め、この関係の記事を中心に編集しました。また。

◆大会中の二つの特別講演について、その印象を丸山久美子、林峻一郎氏に記して載きました。皆様の印象はいかがでしたか。